

氏名 松井 るみ
学位の種類 博士(音楽)
学位記番号 甲第29号
学位授与年月日 令和3年3月23日
論文題目 ポール・ヴェルレーヌ作品における音楽的性格の考察—未完のオペレッタ《フィッシュ=トン=カン》と、詩集『歌詞のないロマンス』の音効果分析を通じて—

学位論文等審査委員

<リサイタル審査>

主査	教授	小濱 妙美
副査	教授	津崎 実
副査	准教授	池上 健一郎
外部審査員		鎌田 直純

(小田原短期大学保育学科通信教育課程教授)

<論文審査>

主査	教授	小濱 妙美
副査	教授	津崎 実
副査	准教授	池上 健一郎
外部審査員		倉方 健作

(九州大学言語文化研究院准教授)

論文要旨

本論文は、声楽家である筆者がポール・ヴェルレーヌ(Paul Verlaine, 1844-96)の詩による歌曲を歌唱する際に覚えた強い共感の正体を探ることを目的としている。

ヴェルレーヌは 1868 年から 1869 年にかけて作曲家のエマニュエル・シャブリエ(Emmanuel Chabrier, 1841-94)と共に 2つのオペレッタを制作した。オペレッタ台本はそのジャンルの性格上、詩芸術とは全く異なり、歌唱されることを前提とする上、内容にも制限が生じる。作曲を約束された台本を制作する中で、ヴェルレーヌが重要視したことにこそヴェルレーヌ作品の「音楽的性格」の核心が存在すると考え、それを明らかにするために、まずオペレッタ《フィッシュ＝トン＝カン Fisch-Ton-Kan》、次に、ヴェルレーヌ作品の中で最も付曲数の多い詩集である『歌詞のないロマンス』の 2 作品を分析することにした。

まず、第 1 章では、本論文における分析に必要な理解を得るため、ヴェルレーヌの詩学、本論について必要な部分を先行研究からまとめたフランス詩法の概要を示し、第 2 章ではヴェルレーヌの誕生からランボーと共にパリを離れるまでの人生についてと、その中での

音楽家との関わりについて先行研究を参考にまとめた。

次に第 3 章では、《フィッシュ＝トン＝カン》の中から〈グルグリー、フィッシュ＝トン＝カン、カカオによるトリオ〉の台本分析をおこない、音楽的な要素のみられる箇所では、シャブリエがどのような音楽を付けたのかを自筆譜と併せて分析した。その結果、子音や母音の重複の効果的な使用や、開母音の連続、鼻母音の多用、奇数音節、音を想起させる言葉など、言葉の中の「音」を効果的に使用している箇所や、音を直接的に想起させる箇所が多くみられた。これらの技法はヴェルレーヌが台本で使用する「言葉」を「音」そのものとして捉えたものと言え、後の詩作活動にも影響を与えているのではないかと考えられる結果となった。

続く第 4 章と第 5 章ではこれまでの結果をふまえ、『歌詞のないロマンス』に含まれる 23 の詩篇を書かれた経緯や内容にも言及しながら、筆者が定義した 4 つの「音効果」(1. 「豊韻法」 2. 「半諧音」 3. 「開母音の使われ方」 4. 「音を想起させる言葉」)に注目して分析した。付曲数を目的変数とし、4 つの音効果の『歌詞のないロマンス』の各詩篇における割合を示す指標を説明変数として重回帰分析を行なった結果、「豊韻法率」が正の相関で有意となり、「半諧音率」が正の相関で有意傾向となった。これは、『歌詞のないロマンス』中、「豊韻法による音効果の割合」が高ければ付曲数も多いということを示す結果であり、この詩集の中で豊韻法が多く見られる詩篇は、作曲家に選ばれ、付曲されやすいということがいえる。また、有意傾向にあった「半諧音率」は、「半諧音による音効果の割合」が豊韻法とは別に付曲数に影響を与えている可能性があり、作曲家にインスピレーションを与える要因の一つになっていることは否定できない。歌唱に都合が良く、《フィッシュ＝トン＝カン》の中でも効果的に使用されている「開母音の連続」の割合からみる「開母音連続

率」は、付曲数と有意な関係は見られなかった。しかし、「詩集」である『歌詞のないロマンス』はオペレッタ台本とは根本的に性質の違う作品であり、「開母音の連続」を多く取り入れることは難解であると考えられる。そのため、楽曲中の開母音が連続している箇所注目して伴奏や旋律を分析することにより、「開母音の連続」が付曲に与えた影響を調べた。その結果、開母音の連続している箇所では、歌唱旋律が、オクターブの跳躍や、レガート、ロングトーン、高音域の維持などが見られた。このように、統計学を使って数値化することと併せて、各「音効果」が作曲家に与えている影響を音楽作品から調べることで、作曲家の視点や、我々歌手が演奏において留意すべき点が明確になった。「音言葉率」でも、付曲数と有意な関係は見られなかったが、我々読み手に直接的な印象を与える「音を想起させる言葉」の存在が、作曲に強い影響を与えていることは容易に想像できるため、楽曲中の音を想起させる言葉に注目し、その伴奏や旋律を分析した。その結果、詩中の「音を想起させる言葉」や詩の持つ印象や雰囲気、作曲された伴奏や旋律にそれを示す形で表現されていることが明らかになった。

これらのことから、ヴェルレーヌがオペレッタ《フィッシュ＝トン＝カン》という、歌われることを前提とした作品を制作した際に培った音楽に対する意識は、「言葉で音を紡ぐ」こととして後の詩作にも影響を及ぼしたことは明らかである。特に『歌詞のないロマンス』中の詩句は、言葉の持つ意味だけでなく、その言葉自体が「音楽」としての役割も担うものであった。筆者が定義した「音効果」は、歌手や読み手、作曲家にも作品を「音楽的」と感じさせるためのものである。本研究では「豊韻法」の多用が「付曲数の多さ」と関係していることが明らかになったが、譜例で紹介した音楽作品中での言葉の扱いをみる限り、それだけが作曲家に音楽的インスピレーションを与えたとは言えない。総合的な判断をするには今後更なる調査が必要であるが、筆者の定義した、これらの「音効果」が詩集『歌詞のないロマンス』をヴェルレーヌの詩作史上、最も付曲数の多い詩集へと導く一因となったと言えるだろう。

審査結果の要旨

＜リサイタル審査＞

2019年10月22日(火)19:30より、本学講堂において、約1時間半のオールフランス語プログラムで、リサイタルが行なわれた。審査員4名は、リサイタル終了後約20分の意見交換をし、合議による合否判定を行なった。

プログラム

- 1 C. ドビュッシー：《Ariettes oubliées》《忘れられた小唄》
 - 2 C. ボルド：《Paysages tristes》《悲しい風景》
 - 3 R. アーン：《Chansons grises》《灰色の歌》
 - 3 E. シャブリエ作曲 P. ヴェルレーヌ台本 未完のオペレッタ
「フィッシュ・トン・カン」より
 - ・プサーのアリア
 - ・トリオ
 - ・アリアとデュオ
 - ・デュオ
- 《Fisch-Ton-Kan》 Air de Poussah, Trio, Air et Duo, Duo

博士学位申請リサイタルは、「ポール・ヴェルレーヌの詩による歌曲たち」と題され、受験者の研究対象であるフランスの詩人ヴェルレーヌの詩に付曲された3人の作曲家の歌曲と、彼が台本を書いた未完のオペレッタ《フィッシュ・トン・カン》(エマニュエル・シャブリエ作曲)から、幾つかのナンバーがプログラムに組み込まれた。

歌曲は、クロード・ドビュッシー、シャルル・ボルド、レイナルド・アーン、とスタイルが全く違う音楽が、波乱万丈なヴェルレーヌの人生の様々な心情を表現する選曲となっていた。特に評価が高かったのはボルドの作品であった。私立音楽院スコラカントラムの創始者の1人でありながら、フランスでもあまり知られていない作曲家である。申請者が今回取り上げた歌曲集『悲しい風景』は、選ばれた4曲を通して同じモチーフを繰り返し使用する作曲方法を試した傑作である。おそらく、今回日本で初めて紹介されたと思われる。

《フィッシュ・トン・カン》は、ヴェルレーヌと友人エマニュエル・シャブリエとの共作オペレッタ。残念ながら、未完に終わっており、出版もされていない。現存する楽譜は、シャブリエの手稿譜のみである。これも、日本初演であったと考えられる。

プログラムとして、ユニークなものを構成しようとする意欲が感じられた。『悲しい風景』や《フィッシュ・トン・カン》のように、日本では初演であり、海外でも上演されることが少ない作品を取り上げ演奏することについては、申請者なりの作品の解釈や表現の工夫等研究要素が多く、それが満足のいくレベルに達していた。

演奏については、爽やかで意欲的な演奏、フレーズもスケールも大きく伸びのある歌声、申請者の内側にフランス語が在り言葉がクリアでジェスチャーが自然、表現力と共に言葉が力を持ち我々

に届いたので全ての曲に集中できた、と審査員全員が好印象の意見を述べた。

申請者の演奏は、ディナーミクに対する適切な制御が留意され、声質の使い分けも作品（特に研究対象であった詩）の内容を繊細に表現出来ていた。安心して音楽に身を委ねられるパフォーマンスとなっており、審査員全員が高い評価を下した。プログラムに関しても、聴衆にとってもわかりやすいプログラムノートに仕上がっていたという意見があった。

以上のような演奏内容、プログラム構成は、博士学位を与えるに十分なレベルに到達しているものと審査員一同の合意を得るに至った。申請者は、今後共日本であまり知られていないフランス歌曲の「伝導」を率先していく立場になると考えられる。それは演奏内容だけでなく、指摘されたような情報発信の仕方を如何に工夫していくかも意味があるであろうとの参考意見が追加で述べられた。また、プログラム最後の《フィッシュ・トン・カン》で共演したジャン＝フランソワ・ルション氏（バリトン）、オノレ・ベジャン氏（ピアノ）、木下紀章氏（テノール）の紹介があっても良かったのではないかという指摘もあった。